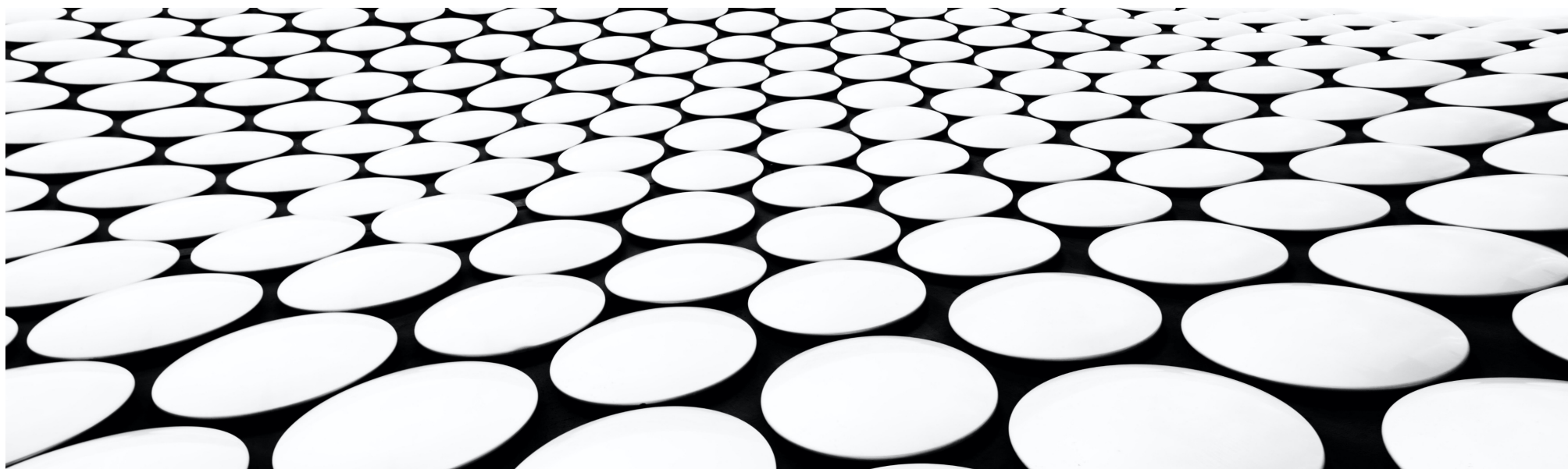

CHOOSE大学

公共性とは何か？

第3回 スポーツと公共性



CHOOSE大学 6月の講義内容

【第1回】メディアと公共性

【第2回】ソーシャル・メディアと公共性

【第3回】スポーツと公共性

【第4回】サブカルチャーと公共性

第3回 スポーツと公共性

目次

★前回のまとめと質問への回答

1. 近代スポーツとオリンピック
2. 排除から包摂へ？

★質問への回答と前回のまとめ

★質問

- ①電波の許認可を非政府独立機関が行うようにはできないのでしょうか？
- ②たしかにアルゴリズムで、TwitterやGoogleでは一部のニュースしか見られない状態になっています。どうやったら満遍なく見たり、偶然の出会いが可能になるのでしょうか。先生は何か工夫とかされていますか？

★ 前回のまとめ

SNSの 開放性

- 市民参加の促進
- 物理的距離を超えた集合とコミュニケーション
- 意見の表明と一時的連帯

SNSの 閉鎖性

- 参加による断片化
- 多様な意見との出会い損ない
- アルゴリズムによる封じ込め

★本日のポイント

- 第1回と第2回は、「メディア」という観点から「公共性」について考えてきました。
- 第3回と第4回は、「文化」という観点から「公共性」について考えていきます。

1. 近代スポーツとオリンピック



1 - 1 近代スポーツと「男性性」

- 近代スポーツの原点には、イングランドのパブリック・スクールの情景がある。
- トマス・ヒューズの小説『トム・ブラウンの学校生活』におけるホモ・ソーシャルな世界観。
- ホモ・ソーシャル：「性愛を伴わない同性同士のつながり、男同士の絆」のこと
- スポーツを通じた学校生活での自己鍛錬と規律訓練、「男の子になる」プロセスの促進

-
- 「より高く、より速く、より強く、より遠く…」というオリンピックのスローガンは、実は「男性性」として求められる肉体的な強靱さを競うための文言。
 - つまり、「近代スポーツ」というものは、そもそも男性に有利なように構成されている。
 - 当時の医学や科学の言説も、スポーツは「女性の生殖能力に有害な影響がある」ことを正当化していた。

1 – 2 オリンピックは女性をいかに排除してきたか？

- 現代のオリンピックでは、「女性アスリート」が注目を集めるようになったが、初期のオリンピックにおいて、女性アスリートは排除されていた。
- 第1回アテネ・オリンピック（1896年）では、参加を拒否された女性が、非公式な参加ながらもフルマラソンを4時間30分ほどで走りぬいたという逸話がある
(Hargreaves 1994)

開催年	開催場所	女性の参加人数
第1回（1986年）	アテネ	0名
第2回（1890年）	パリ	全体の1%にも満たない12名 （公式種目への参加は内2名）
第3回（1904年）	セントルイス	8名
第4回（1908年）	ロンドン	43名
第32回（2021年） 〔予定〕	東京	混交種目の採用、女性の参加率 48.8%の見込み

-
- 初期オリンピックでは、参加できたとしても女性アスリートの地位は低く、メダルの代わりに賞状1枚渡すのみ。
 - 競技への参加から締め出す一方で、男性の勝利者に対して開催国の若い女性にメダルなどを運ばせる。
 - テニス、水泳、フィギュアスケートなど「女性に適した」競技への限定的な参加を認める

⇒女性の「身体美」の切り取りと再配置



四国新聞 (<http://www.shikoku-np.co.jp/national/international/print.aspx?id=20071206000385>)

AFPbbnews

(<https://www.afpbb.com/articles/-/3173714>)

⇒他のスポーツにも転用



-
- スポーツ研究者であるハーグリーブスは初期オリンピックの様子を、「**典型的な性差別主義と反動的なスタンスで、IOCは女性（参加）の進行を体系的に阻み、公式的なプログラムの外側で「女性に適した」いくつかの種目だけを行うよう促した。しかも、女性たちの種目が公式的に行われている場合でさえ、男性の競技者とは同等の地位を1924年まで与えることはなかった**」とまとめている。

-
- クーベルタン曰く「オリンピック競技は男性によって保有されるべきであると私は感じている」、「女性によって行われる（略）スポーツに、オリンピックのために集まっている観客たちを魅了するようなスペクタクルを作り上げることができると思っているのか？ 私はそうは思わない」

⇒当時の「価値観」を反映しているから仕方がない？

そうであるとするなら、「スポーツ」や「オリンピック」は、決して「政治とは無縁なもの」ではなく、むしろ「政治そのもの」であるということになる。

- 女性のオリンピック参加は「**非実用的で、面白くもなく、見苦しい**うえに、**はっきり言うと下品である**」
- 「**女の栄光は、彼女が生んだ子供の数と質を通して勝ち取られるものであり、スポーツについて言うなら、女の最大の功績は彼女自身が記録を目指すことではなく、彼女の息子が卓越するよう励ますことである**」



★クーベルタン男爵

2. 排除から包摂へ？

2 - 1 オルタナティブなオリンピック運動

- 初期オリンピックから排除された女性たちは、オルタナティブなオリンピックを立ち上げる
- オルタナティブ：「別の」、「代わりの」、「代替的な」という意味
- 1900年代には、西欧諸国で女性スポーツ組織が形成され、女性スポーツの発展を求める人々が登場する

-
- 1921年に欧米の女性アスリートたちが、国際女子スポーツ連盟を創設
 - 1922年に「世界女子オリンピック」をパリで開催
⇒多くの観客を集め大成功すると、IOCが「オリンピック」という語の独占的な使用権を主張したため「世界女性競技大会」と改名
 - その後も、1926年イエテボリ、1930年プラハ、1934年ロンドンで開催される。

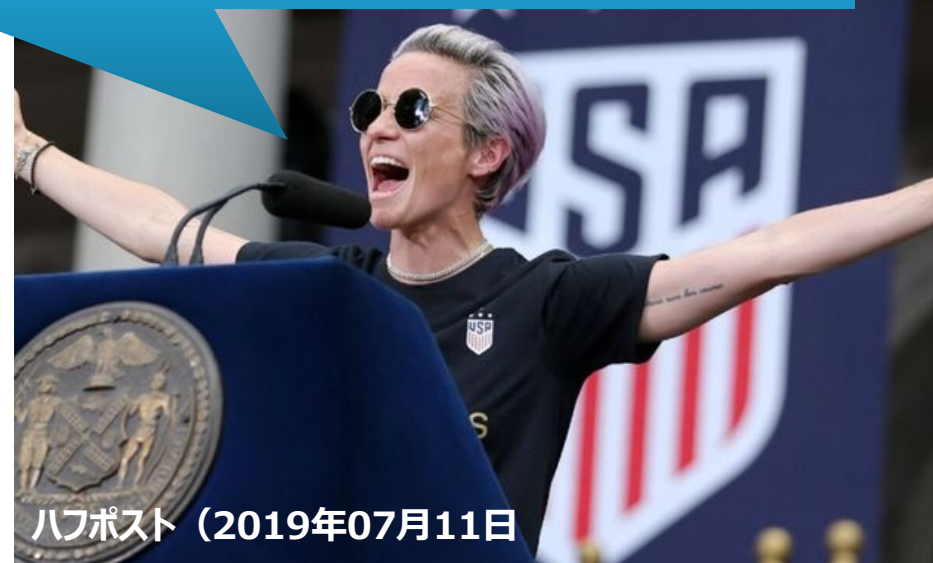
2 - 2 女子スポーツの時代

- 1970 年代に入ると、「女性の権利」を主張するフェミニズムの運動が世界中で高まる。
- 1994 年の「世界女性スポーツ会議」において、「スポーツのあらゆる面において、女性が最大限に関わることを可能にし、そして尊重する」ことを目的に、「ブライトン宣言」が採択される。
- 1996年のアトランタ・オリンピックは「女性の年」と言われ、男性コーチと女性アスリートの間のセクシュアル・ハラスメントや性的虐待の問題が話題になり、女性アスリートの活躍が報道される。

★ミーガン・ラピノー選手のスピーチから分かること

- 参加者の数は均等になった現在においても、スポーツの世界では男性が優位で、女性が劣位に置かれ続けている。

私たちはアメリカに4度のワールドカップ王者、4度のオリンピック金メダルをもたらしてきましたにもかかわらず、同じ仕事をしている男性よりも給料が低いのです。



ハフポスト（2019年07月11日）

2－3 包摂の中の排除

- 歴史的に排除してきたある種の差異を包摂していく一方で、現代のオリンピックは開催することにより、さまざまな排除を行っている。
- そのひとつが開催都市における再開発と強制退去。
「新国立」建設で立ち退き、暮らし壊された「五輪だから、何でも通るのか」
(京都新聞、2020年1月9日)
- 「オリンピック例外主義」(山本 2021)

★ 強制排除される開催地の市民



ハフポスト：リオ

(https://www.huffingtonpost.jp/2016/08/23/olympics-are-always-a-disaster_n_11658856.html)

finding.Dulcinea：北京

(<http://www.findingdulcinea.com/news/international/July-08/In-Beijing-Forced-Evictions-Make-Room-for-Olympics.html>)



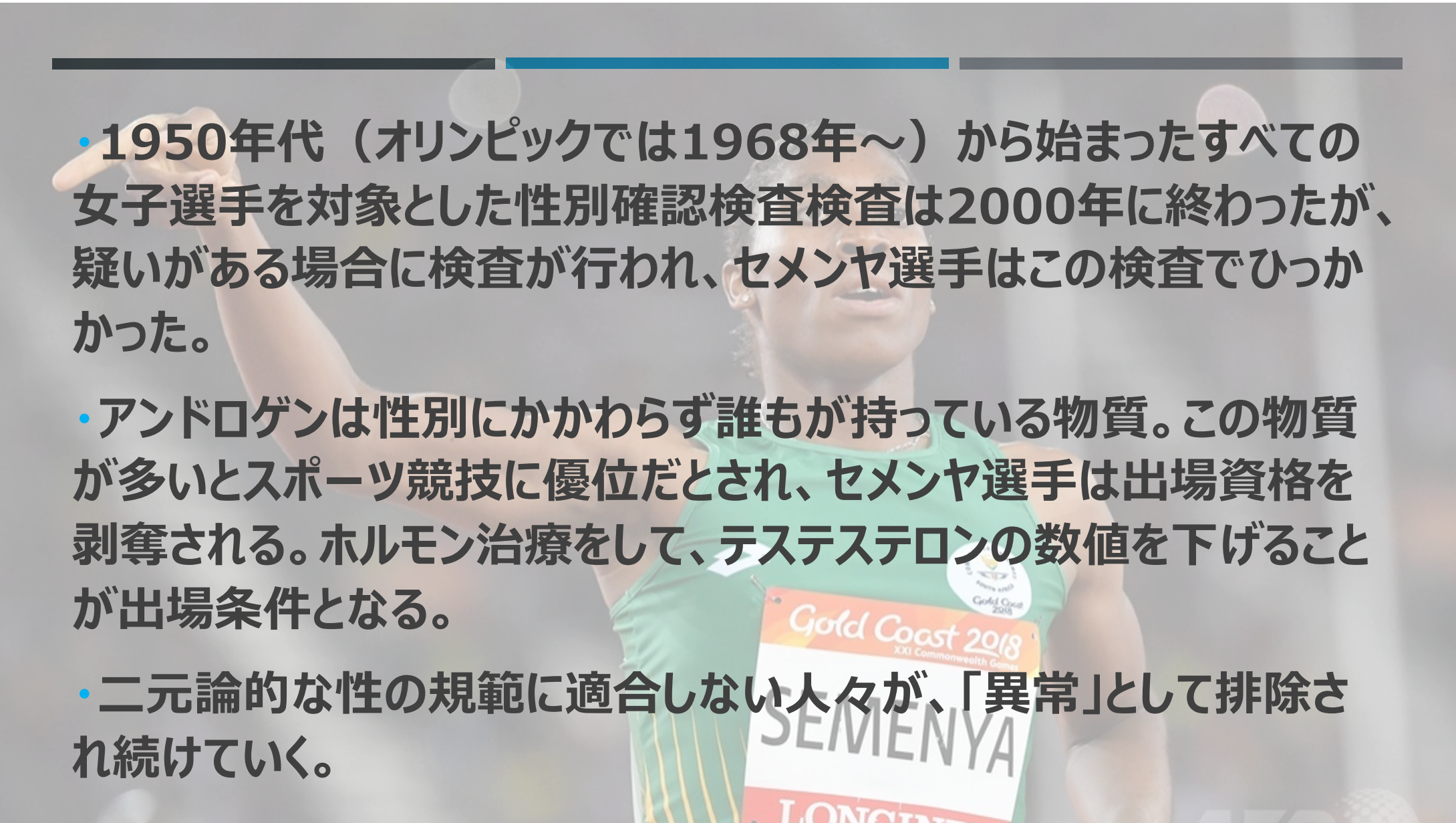
- コロナ禍の下でのオリンピックの開催の是非について、なぜ私たちは参画することができないのか？
- 一部の例外を除いて、日本のアスリートたちはなぜ、沈黙を保っているのか？



Jamming the Olympic Rings: Anti-Olympics Art Across Space and Time (<https://laptrinhx.com/news/jamming-the-olympic-rings-anti-olympics-art-across-space-and-time-GbrDpQ4/>)

★キャスター・セメンヤ選手

- 1991年生まれの南アフリカ共和国の陸上競技選手。800mを得意とする。
- 2009年ベルリン世界陸上での優勝を機に、性別を偽っているのではないかという疑惑の目を向けられるようになった。
- 医学的にはアンドロゲン過剰症と呼ばれる男性ホルモンの一種「テストステロン」のレベルが高く、一般女性の3倍あることが判明してから、注目と批判にさらされ続けてきた。
- 2011年大邱世界陸上、2012年ロンドンオリンピック、2016年リオデジャネイロオリンピック、2017年ロンドン世界陸上の金メダリスト。

- 
- 1950年代（オリンピックでは1968年～）から始まったすべての女子選手を対象とした性別確認検査は2000年に終わったが、疑いがある場合に検査が行われ、セメnya選手はこの検査でひっかった。
 - アンドロゲンは性別にかかわらず誰もが持っている物質。この物質が多いとスポーツ競技に優位だとされ、セメnya選手は出場資格を剥奪される。ホルモン治療をして、テストステロンの数値を下げることで出場条件となる。
 - 二元論的な性の規範に適合しない人々が、「異常」として排除され続けていく。

-
- 政治や経済と異なり、文化的な領域は誰もが自由に参加できる公共の空間であるように考えてしまいが、そこにはつねに排除と包摂の線が引かれている。
 - 文化的な領域は、参加できる者と排除された者による「ミクロな政治闘争」の空間なのである。
 - 「公共性」を維持するためには、私たちは排除の線がどこに引かれているのかということに、できる限り敏感である必要がある。

- 次回予告

👉「サブカルチャーと公共性」

★参考文献・映像

- 田中東子（2004）「オリンピック男爵とアスレティック・ガールズの近代」（『オリンピック・スタディーズ—複数の経験・複数の政治』、清水諭編、せりか書房）
- 田中東子（2017）「第三波フェミニズム，スポーツと女性，身体表象」（『出来事から学ぶカルチュラル・スタディーズ』、田中東子＋山本敦久＋安藤丈将編、ナカニシヤ書店）
- 田中東子（2020）「その輝きには要注意！ー「参加」することに意義はあるのか？」（『現代のバベルの塔ー反オリンピック・反万博』、新教出版編集部編、新教出版社）
- ヘレン・ジェファースン・レンスキー（2021）『オリンピックという名の虚構ー政治・教育・ジェンダーの視点から』、井谷 恵子＋井谷聡子監修、晃洋書房
- 山本敦久（2021）「オリンピック例外主義」、『年報カルチュラル・スタディーズ vol. 9』、カルチュラル・スタディーズ学会編
- Jennifer Hargreaves（1994）*Sporting Females: Critical Issues in the History and Sociology of Women's Sport*, Routledge
- ジョン・J・マカルーン（1988）『オリンピックと近代ー評伝クーベルタン』、柴田元幸＋菅原克也 訳、平凡社
- 京都新聞（<https://www.kyoto-np.co.jp>）
- ハフポスト（<https://www.huffingtonpost.jp>）